TADOKU JUNIOR　ピノッキオの冒険　★★★☆☆ ふつう　674語

Pinocchio, Chapter 26

第26章　サメを見に海べへ

Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)（1883年の本）　原文そのまま　朗読：Mark F. Smith

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　学校に通いはじめたピノッキオは、すぐに人気者に。ところがある日、悪い仲間に「大きなサメを見に行こう」とさそわれて……。



Pinocchio goes to the seashore with his friends to see the Terrible Shark.

In the morning, bright and early, Pinocchio started for school.

Imagine what the boys said when they saw a Marionette enter the classroom! They laughed until they cried. Everyone played tricks on him. One pulled his hat off, another tugged at his coat, a third tried to paint a mustache under his nose. One even attempted to tie strings to his feet and his hands to make him dance.

For a while Pinocchio was very calm and quiet. Finally, however, he lost all patience and turning to his tormentors, he said to them threateningly:

“Careful, boys, I haven’t come here to be made fun of. I’ll respect you and I want you to respect me.”

“Hurrah for Dr. Know-all! You have spoken like a printed book!” howled the boys, bursting with laughter. One of them, more impudent than the rest, put out his hand to pull the Marionette’s nose.

But he was not quick enough, for Pinocchio stretched his leg under the table and kicked him hard on the shin.

“Oh, what hard feet!” cried the boy, rubbing the spot where the Marionette had kicked him.

“And what elbows! They are even harder than the feet!” shouted another one, who, because of some other trick, had received a blow in the stomach.

With that kick and that blow Pinocchio gained everybody’s favor. Everyone admired him, danced attendance upon him, petted and caressed him.

As the days passed into weeks, even the teacher praised him, for he saw him attentive, hard working, and wide awake, always the first to come in the morning, and the last to leave when school was over.

Pinocchio’s only fault was that he had too many friends. Among these were many well-known rascals, who cared not a jot for study or for success.

The teacher warned him each day, and even the good Fairy repeated to him many times:

“Take care, Pinocchio! Those bad companions will sooner or later make you lose your love for study. Some day they will lead you astray.”

“There’s no such danger,” answered the Marionette, shrugging his shoulders and pointing to his forehead as if to say, “I’m too wise.”

So it happened that one day, as he was walking to school, he met some boys who ran up to him and said:

“Have you heard the news?”

“No!”

“A Shark as big as a mountain has been seen near the shore.”

“Really? I wonder if it could be the same one I heard of when my father was drowned?”

“We are going to see it. Are you coming?”

“No, not I. I must go to school.”

“What do you care about school? You can go there tomorrow. With a lesson more or less, we are always the same donkeys.”

“And what will the teacher say?”

“Let him talk. He is paid to grumble all day long.”

“And my mother?”

“Mothers don’t know anything,” answered those scamps.

“Do you know what I’ll do?” said Pinocchio. “For certain reasons of mine, I, too, want to see that Shark; but I’ll go after school. I can see him then as well as now.”

“Poor simpleton!” cried one of the boys. “Do you think that a fish of that size will stand there waiting for you? He turns and off he goes, and no one will ever be the wiser.”

“How long does it take from here to the shore?” asked the Marionette. “One hour there and back.”

“Very well, then. Let’s see who gets there first!” cried Pinocchio.

At the signal, the little troop, with books under their arms, dashed across the fields. Pinocchio led the way, running as if on wings, the others following as fast as they could.

Now and again, he looked back and, seeing his followers hot and tired, and with tongues hanging out, he laughed out heartily. Unhappy boy! If he had only known then the dreadful things that were to happen to him on account of his disobedience!

ピノッキオは友だちといっしょに、おそろしいサメを見に海べへ出かけます。

朝早く、ピノッキオは学校へ出かけました。

あやつり人形が教室に入ってきたのを見て、男の子たちが何と言ったか、想像してみてください！みんな、なみだが出るほど笑いました。だれもが、ピノッキオにいたずらをしかけました。ひとりはぼうしをひったくり、もうひとりは上着を引っぱり、3人目は鼻の下にひげをかこうとしました。糸を足や手に結びつけて、おどらせようとする子までいました。

しばらくのあいだ、ピノッキオはとても落ち着いて、だまっていました。けれども、とうとうがまんできなくなって、いじめっ子たちのほうを向き、すごみをきかせて言いました。

「気をつけろよ、きみたち。ぼくはからかわれるために来たんじゃない。ぼくはきみたちをばかにしないから、きみたちもぼくをばかにしないでほしいんだ。」

「物知り博士、ばんざい！まるで本に書いてあるみたいなことを言うね！」と男の子たちは大笑いしながらはやしたてました。中でもとくになまいきな子が、あやつり人形の鼻を引っぱろうと手をのばしました。

けれども、その子はまにあいませんでした。ピノッキオがテーブルの下で足をのばし、その子のすねを思いきりけとばしたからです。

「いたっ、なんてかたい足なんだ！」とその子は、けられたところをさすりながらさけびました。

「それに、このひじ！足よりもっとかたいぞ！」と、別の子がさけびました。その子は、ほかのいたずらをしたせいで、おなかにひじてつをくらったのです。

そのひとけりとひじてつで、ピノッキオはみんなに気に入られました。だれもがピノッキオに感心し、ちやほやして、なでたりかわいがったりしました。

何日も何週間もたつうちに、先生までピノッキオをほめるようになりました。話をよく聞き、よく勉強し、いつもしゃきっとしていて、朝はいちばんに来て、学校が終わるといちばん最後に帰るのを見ていたからです。

ピノッキオのたった1つの欠点は、友だちが多すぎることでした。その中には、勉強にも出世にもまるで関心のない、名の知れたわんぱくたちがたくさんいました。

先生は毎日ピノッキオに注意しましたし、やさしいようせいも何度もこう言いました。

「気をつけなさい、ピノッキオ！そういう悪い仲間といると、そのうち勉強が好きな気持ちをなくしてしまうわ。いつか、悪い道へ連れていかれてしまうわよ。」

「そんな心配はないよ。」とあやつり人形は答えて、かたをすくめ、「ぼくはかしこすぎるからね。」と言うように、自分のおでこを指さしました。

そうしたある日、学校へ歩いていくとちゅう、何人かの男の子たちがかけよってきて言いました。

「ニュースを聞いた？」

「ううん！」

「山みたいに大きなサメが、岸の近くで見つかったんだって。」

「本当？お父さんがおぼれたときに聞いたのと、同じサメかなあ？」

「ぼくら、見に行くんだ。きみも来る？」

「ううん、ぼくは行かない。学校へ行かなくちゃ。」

「学校なんかどうでもいいだろ？あした行けばいいよ。授業が1つ多くても少なくても、ぼくらはどうせみんな同じおばかなロバなんだから。」

「先生に何て言われるかな？」

「言わせておけばいいさ。先生は一日じゅう文句を言うのでお金をもらっているんだから。」

「お母さんは？」

「お母さんなんて、何もわかりゃしないよ。」と、わんぱくたちは答えました。

「ぼくがどうするか、わかる？」とピノッキオは言いました。「ぼくにもわけがあって、そのサメを見たいんだ。でも、学校が終わってから行くよ。それからでも、今と同じように見られるもの。」

「おばかさんだなあ！」とひとりの男の子がさけびました。「あんなに大きな魚が、きみのことをじっと待っていると思うのかい？くるっと向きを変えて行っちゃったら、もうだれにもわからなくなるんだぞ。」

「ここから海べまで、どのくらいかかるの？」とあやつり人形はたずねました。「行って帰って1時間さ。」

「よし、それなら。だれがいちばん先に着くか、競争だ！」とピノッキオはさけびました。

合図とともに、小さな一行は本をわきにかかえて、野原をかけだしました。ピノッキオは先頭に立ち、つばさが生えたように走り、ほかの子たちはできるだけ速く後を追いました。

ときどきふり返っては、みんなが暑そうにつかれて、舌をだらりと出しているのを見て、大声で笑いました。かわいそうな子！言うことを聞かなかったせいで、このあとどんなおそろしいことが起こるのか、そのときわかっていればよかったのに！

たんご と クイズ　第26章　サメを見に海べへ

classroom 教室	**hat** ぼうし	**mustache** ひげ
teacher 先生	**Shark** サメ	**books** 本

Q1 鼻を引っぱろうとした子に、ピノッキオは何をした？

① 泣いて家に帰った　② すねをけとばした　③ 先生に言いつけた

Q2 ピノッキオのたった1つの欠点は？

① 友だちが多すぎること　② ねぼうすること　③ うそをつくこと

Q3 男の子たちは、何を見に行こうとさそった？

① 大きなクジラ　② 船のレース　③ 山のように大きなサメ

こたえ

Q1 ②　テーブルの下で足をのばして、すねを思いきりけとばしました。木の足なので、とてもかたかったのです。

Q2 ①　友だちが多すぎて、その中には勉強がきらいなわんぱくもたくさんいたのです。

Q3 ③　山のように大きなサメが岸の近くで見つかったと聞いて、学校を休んで見に行こうとさそったのです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #500（Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)、1883年）。パブリックドメイン。

挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。

朗読（Web版）：Mark F. Smith（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）

和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。